

桐朋学園大学大学院 修士課程

修了演奏発表

<大学院修士課程 2年>

弦楽器 (Vc,Cb)

2019年1月22日(火) 13:00開演 (12:30開場)

桐朋学園大学 仙川キャンパス S302教室

【13時00分～】

金 紗愛

共演者：百瀬 功太

S.Koussevitzky : Concerto Op.3 2,3mov. fis-moll

G.Bottesini : Reverie e-moll

G.Bottesini : Tarantella a-moll

G.Bottesini : Elegy No.1 D-dur

R.Gliere : Tarantella Op.9 No.2 d-moll

〈Concerto Op. 3 2, 3mov. /S. koussevitzky〉

1905年にモスクワで初演されたこのコントラバス協奏曲は、彼の代表作と言える。ただ、この協奏曲はピアノ伴奏譜は友人の作曲家グリエールが、オーケストレーションはトルミンが担当し、彼自身によって書かれた部分は独奏パートのみとされている。なお、第1楽章と、第1楽章の音楽が再現される第3楽章ではクーセヴィツキーの名人芸もかくやという技巧的なパッセージが実に印象的だ。第2楽章ではロシア民謡風な旋律がコントラバスによって朗々と奏でられていく。ところで、第1楽章冒頭のモチーフは終楽章にも登場するし、最終楽章の締めくくりには第2楽章の中心部の引用もある。私は全体的に同じロシアを代表するチャイコフスキーの影響が大きいと感じる。暗く激しさのある第1楽章、リリカルに歌い込む長調の第2楽章、第1楽章の再現から始まる第3楽章の3つからなるが、各楽章に切れ目はなく、全曲通して演奏される。

このコントラバス協奏曲は、ロシアの伝統を感じさせるコントラバスの名曲として演奏される機会が多い作品である。今回私は2、3楽章を演奏する。

〈Reverie(夢, 夢想) /G. Bottesini〉

夢は、ボッテシーニによる独奏コントラバスとピアノのための短い小品である。

ボッテシーニが59歳の5月12日にナポリで当時はチェロとピアノのための曲として作曲された。因みに28日に「ネパールの女王」のオーケストレーションを終えた。

この曲は、メロディーに多く三連符が出てくる。エレジーよりも遅いLentoという指示のゆったりとしたテンポ、そして曲が短調から長調に変化していくということから（三連符が多く出てくることで曲がしっかり前に進んでいるように聴こえるので）ボッテシーニの思い描いていた夢は、常に前に進み続け、苦しいことも辛いことも最後にはハッピーエンドで終わり、夢を持ち続けること、夢そのものの美しさを感じることができる。

〈Tarantella/G. Bottesini〉

タランテラは、ボッテシーニによる独奏コントラバスとピアノのための作品である。

ピアノのオペラの幕開けのようなイントロのあと、独奏コントラバスがカデンツァで曲を始め、ピアノの伴奏が入ると同時に普通拍子から8分の6拍子になりタランテリズムでこの曲の主題であるメロディーを弾く。三部形式であり、中間部では4分の2拍子と8分の6拍子を交差しながら緩やかになるがそこからすぐに明快さを取り戻し、最初に提示した主題のメロディーに戻る。やがて最後はA-durに転調し、フラジオレットや和音で超絶技巧を披露する。ボッテシーニのコントラバスソロ曲のレパートリーの中でもこの曲はとりわけ難しく、超絶技巧曲としても知られているがその速く明快なメロディーはとても親しみやすいので今日でも多くのコントラバス奏者によって演奏されている。名コントラバス奏者のルートヴィッヒ・シュトライヒャーによる演奏が有名であり、1998年に日本のテレビに出演したときもこの曲を披露した。

〈Elegy No. 1/G. Bottesini〉

エレジーは、ボッテシーニによる独奏コントラバスとピアノのための短い小品である。ボッテシーニの作品は難曲が多いが、この曲は歌曲のような柔らかい歌が印象的である。「哀歌」と言っても短調の激しい哀しみではなく、どちらかと言うと過去への回想を思わせるような、長調の穏やかで優しい曲だ。「郷愁の歌」と表す人もある。（ボッテシーニは非常に広範囲で活躍し、故国を離れる事が多かった。）

作曲者本人もこの曲を非常に愛し、自身のリサイタルでもこの曲はプログラムから決して外さなかったようだ。この曲も、エレジーと同様に伴奏・メロディー共に三連符が多く出てくる。Andanteというゆっくりとしたテンポではあるが、その中で特に伴奏のピアノパートは常に三連符が出てくるということは優

しい感情ながらも常に時は流れ、強弱も徐々に膨らんでいくことから、ただの哀しみを表しているだけでなく、ポッテシーニの優しく幸福に満ち溢れた感情も現れている。

〈Tarantella Op. 9 No. 2/R. Gliere〉

この曲はグルエールが32歳の時の作品である。コントラバスソリストにとって、実に貴重なレパートリーとなる作品の一つだ。まずは1902年に作曲した、コントラバスとピアノのための2つの小品 Op. 9。1曲目の間奏曲は静寂の中に抒情的な調べが魅惑的な曲、2曲目のタランテラはコントラバスの超絶技巧曲。そして、遅れて1908年に作曲した、コントラバスとピアノのための2つの小品 Op. 32。1曲目の前奏曲は切れ切れにコントラバスとピアノが心地よいダイアローグを展開する幻想的な曲、2曲目のスケルツォは躍動的なリズムが特徴でスケールの広い曲。グルエールは1905年、ベルリン留学中にセルゲイ・クーセヴィツキーと親しくなり、彼のために4つの小品を残している。いずれもコントラバスの性能を存分に発揮できるように作られ、特にこの「タランテラ」は「現在この世で最も難しいコントラバス独奏曲」と言われるほどの難曲である。テンポが速く、左手が指板の上を走り回るように見える曲だ。

森田 麻友美

共演者：百瀬 功太

G.Bottesini:Capriccio di bravura

G.Bottesini:Melodie (Rmanza patetica)

Bach:Suite No.3 allemande

R.Gliere:Tarantella

G. Bottesini<1821-1889>はイタリアの作曲家兼コントラバス奏者である。彼はイタリアで生まれ、オペラ劇場で生活していたと言っても過言ではないほど彼の作品はオペラ調の歌曲的なアプローチが多いことがうかがえる。

その当時はコントラバスのパガニーニと呼ばれていたほど超絶技巧に秀でた技能を持つ奏者であることから、彼の作品は巧妙な技術を要するために演奏する事は容易ではないのである。

彼がコントラバス業界に存在しなければ、オーケストラとしての低音楽器からソロ楽器への発展は考えられなかっただろう。

カプリチオ・ディ・ブラブーラはゆったりした序奏から始まり、後半は技巧的なスピード感のあるテンポへ移り変わる。序奏ではイタリア歌曲らしいオペラのように朗々と歌い上げ、広い音域を存分に活かした美しいメロディーが印象的である。後半ではハーモニクスの技巧がたっぷりと組み込まれおり、息をする間もなく曲が展開していく。まさに超絶技巧曲と言われんばかりの難易度の高い曲である。

メロディーも同じくハーモニクスを巧みに用いており、美しくロマンティックなメロディーである。エレジエ3番という名でも出回っている曲であるが、この曲は短調で構成されており、再現部が長調になり思い出となって消えるように曲が終わってゆく。中間部分はまだ短調の陰気な雰囲気は残るが、ピアノに軽やかな8分音符のリズムの素材がでてきて次第に輪郭が濃くなってゆく。イメージは苦しみのどん底から彷徨い古き良き思い出のシーンが次第に溢れ、レガートの半音階で長調の和音へと一気に駆け上がり、明るい和音の再現部へと繋がってゆく。そしてテーマの素材や提示部の音形を一切変えないまま長調で歌い上げ、先程とはまるっきり異なったメロディーが奏られる。曲の最後は音圧をほとんど感じさせない天から光が差すようなハーモニクスで響きのあるアルペジオで上行して行き、この曲の最高音で締めくくる。冒頭からは全く想像のつかない形で締めくくるといった非常にドラマティックな曲である。

グルエール(1874-1951)はロシア革命以前、モスクワ音楽院でともに学んだ名コントラバス奏者セルゲイ・クーセヴィツキーとの交流からいくつかのコントラバス作品を書いている。

タランテラもコントラバスの難曲中の難曲で知られており、とてつもない速さで左手が指板を駆け回る所から世界で一番難しいコントラバスの独奏曲とも言われている。舞曲のように軽やかな雰囲気を漂わせつつも、中間部のメロディーはくどくなく心に自然に入ってきやすいメロディーが響き渡る。曲全体的にテンポが速くコントラバスの重々しい概念を一転してくれる作品だ。

Schubert: Sonata for Piano and Arpeggione in a minor D.821

Mendelssohn: Sonata for Piano and Violoncello in D major Op. 58

シューベルトのアルペジオーネ・ソナタは、1824年にウィーンで作曲された。この曲は本来、発明されて間もなかったアルペジオーネという名称の、6弦ギターを足で挟み、弓で弾くというチェロと似た奏法で弾かれる楽器のために作られたのだが、このアルペジオーネは発明後約10年の間に廃れてしまい、今日ではアルペジオーネの復元は存在するものの、チェロ編曲を筆頭に、ヴィオラ、フルート等の編曲版での演奏が一般的である。

第1楽章 Allegro moderato

第2楽章 Adagio

第3楽章 Allegretto

メンデルスゾーンのピアノとチェロのためのソナタ作品58はメンデルスゾーンが作曲した2番目のソナタで、1843年に作曲された。メンデルスゾーンはピアノとチェロのための作品を4曲書いており、番号付きのソナタはこの作品58と作品45の2曲である。第1番はシューマンから絶賛され、弟であるパウル・ヘルマン・メンデルスゾーンに捧げられた。それに対しこの第2番は弟のパウルとイタリアのチェロの名手であるアルフレード・カルロ・ピアッティに助言を受けて作曲され、初演を自身のピアノとピアッティのチェロでイギリスにて行われた後、ロシアのミハイル・ヴィーホルスキ伯爵に献呈された。

第1楽章 Allegro assai vivace

第2楽章 Allegretto scherzando

第3楽章 Adagio

第4楽章 Molto Allegro e vivace

<ご来場の際のお願い>

音楽部門の警備室にて、お名前を確認できるものをご提示頂きます。

ご提示のない場合や定員を超過した場合は入場をご遠慮頂く場合もございます。

<試験のため、以下の諸点についてご注意いただきたくお願いいたします>

(1) 写真・ビデオ等の撮影・花束贈呈・演奏中の入・退場

はご遠慮ください。

※演奏者交代時等演奏の合間の入・退場は係員の指示に従ってください。

(2) 小学生低学年以下のお子様の入場はご遠慮ください。

(3) 会場内では携帯電話およびアラーム時計等の電源をお切りください。

(4) 採点員席への立ち入りは固くお断りします。

今後の修了演奏発表日程

1月23日(水) 9:30～ 調布キャンパス C008・C001 教室

1月24日(木) 14:00～ 調布キャンパス C008 教室

1月26日(土) 13:00～ 調布キャンパス C008 教室

曲目等詳しいご案内は こちらまで

<http://www.tohomusic.ac.jp/college/graduate/concert.html>

—ご来場をお待ちしております—

桐朋学園大学大学院

電話 042-444-7055 (調布キャンパス代表)

FAX 042-444-7056